

アクリル絵具【基礎編】

20世紀に生まれた絵具

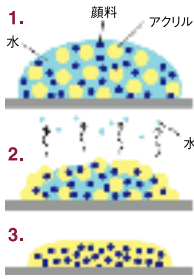
アクリル絵具は1950年代のアメリカで誕生。50年代、60年代の抽象表現主義の画家たちがこぞって作品を制作・発表したこと、瞬く間に世界中に広まった絵具です。アーティストたちを魅了した理由は、水で薄めて使用できること、速乾性があること、発色が鮮やかなこと、混色制限がないこと、基底材を選ばず、砂を混ぜるなどのマチエールづくりやコラージユが容易にできることなど、それまでの油絵具にはなかった特長が挙げられます。

アクリル絵具とはそもそもどんな組成、性質を持つ絵具なのか。表現の可能性を広げるためには、どんなポリマー、メディウムを使えばいいのか。そういった点から、数回にわたってアクリル絵具を解剖してみます。

油絵具との相違点——アクリル樹脂、エマルションの特性

アクリル絵具が油絵具と大きく異なるのは、メディウムに合成樹脂を使ったことです。合成樹脂は石油からつくられるエチレンを原料にしたもので、アクリル絵具に使われている樹脂(アクリル樹脂)は、エチレンを連結させたポリマー(重合体)という高分子化合物の一種です。アクリル絵具は、このポリマーを固体の微粒子のまま水中に分散させたコロイド状の液体(これをエマルションといいます)に、顔料を混ぜてつくられます。

図はアクリル絵具の組成と乾燥のプロセスを、単純化して示したものです。



図はアクリル絵具の組成と乾燥のプロセスを、単純化して示したものです。チューブから取り出したアクリル絵具は、水の中に顔料とアクリル樹脂が分散した状態で、全体の約4分の1が水でできています(1)。放置しておく、とほとんど水が蒸発します(2)。乾燥すると、ポリマーと顔料同士が集まって耐水性のある塗膜をつくり(3)。これがアクリル絵具が乾燥・定着した状態です。「アクリル絵具は痩せる」というのは、体積の4分の1を占める水がなくなるためです。しかし、速乾性はすばらしく、ガラス板上に0.3ミリの厚さにア

クリル絵具を塗った場合、完全に水がなくなるまで72時間という実験データを得ています。キャンバスなど吸収性のある地に塗った場合は、さらに短時間で乾燥します。

また、ポリマーはエマルション状態のときは乳白色ですが、乾くと透明になります。濡れているときは白みがかつて明るく見え、乾くと白みが消えて明度が下がり暗く見えます。濡れ色と乾き色に差が現れるのはそのためです。体積の減少、濡れ色と乾き色の差。油絵具になじんだ人がアクリル絵具に物足りなさを感じるのは、この2点かもしれません。しかし、水で簡単に溶くことができ、乾燥すると耐水性になるアクリル樹脂を使ったアクリル絵具は、そういった欠点を補う多くの魅力を持っているのも確かです。

アクリル絵具の仲間

顔料をエマルションで練り合わせたのがアクリル絵具ですが、ホルベインには「アクリラ」と「アクリラ ガッシュ」の2種類があります。前者が通常の透明〜半透明色のアクリル絵具で、後者はエマルションの樹脂濃度を低くしたものに顔料を混ぜ、不透明色にしたタイプのアクリル絵具です。

この他にも、アクリル樹脂を使った絵具に「エアロフラッシュ」と「カラージェツ」があります。前者は液状アクリル絵具と呼ばれ、エアブラシ技法や描画用インクとして使われるもの。後者は下地に開発された色つきのジュゴンですが、最近では粒子の粗いアクリル絵具として積極的に使うアーティストが増えています。

以上は水性タイプのアクリル絵具ですが、アクリル樹脂をシンナーなどの有機溶剤の中で重合させてつくりました油性タイプのものであり、これを流動状にして顔料を混ぜたものを油性アクリル絵具といえます。絵画の修復など、特殊な用途に使われます。

今回は組成、成分の持つ特性を軸に油絵具との相違点を述べました。次回は「プライマー、メディウムなど、アクリル絵具の表現の可能性を広げる製品について述べていきます。



「アクリラ」 透明〜半透明、艶あり
「アクリラ ガッシュ」 不透明つや消し

※参考資料：「絵具の科学」ホルベイン工業技術部編、美術出版社

ホルベイン絵具に関する
ご質問・ご相談は…

ホルベイン絵具 技術サービスセンター TEL.0729 (85) 1223
〒579-8063 東大阪市横小路町4-10-52
電話受付時間/9:00~16:00 月~金曜日(祝日を除く)



ホルベイン絵具